

新しい技術にふれ、壁にもぶつかり、仕事のリアルに迫る

世羅高校（広島・県立）

現場や最先端を知る社会人と生徒たちが協働で地域探究

広島県立世羅高校は、普通科・農業経営科・生活福祉科のある学校だ。

以前から普通科では、町役場や観光協会と連携し、町の活性化を目指す探究活動を行ってきた。また、農業経営科では、世羅茶の栽培・収穫・商品開発に生徒が携わったり、広島市内で養蜂に挑戦したりと、地元産業と連携した学習も推進してきた。

生活福祉科では、2022年より町役場および大手IT企業と組み、生徒が講師となり、地元の高齢者のスマホの悩み相談にのる会を実施、大好評を博す。これを機に、世羅町と同企業は「デジタル人材育成とデジタル推進」で連携する協定を結び、スマホ相談会にとどまらず、世羅高校の生徒の日々の学習をICTの面でサポートする体制を整えていった。

こうしたなかで、同校は2年生の総合的な探究の時間のやり方を大幅に見直す。2023年度より、3学科の生徒が混ざり合って協働で探究する形にし、進路希望別に分かれた10のグル

ープで、地域課題の発見・解決にあたるようにしたのだ。そしてその活動に、各科が築いてきたコネクションを最大限に生かし、多様な外部の協力を仰いだ。生徒からすれば、産官学のさまざまな職業の人と協働しながら探究する形だ。

改革の初年度に、この探究活動のまとめ役を担った平山愛佳先生は、一連の変化を前向きに捉えたという。

「以前に普通科のみで町の活性化の探究をしていた時も、生徒たちは最終的に町役場で具体的な提案をすることまでがんばっていたんです。ただ、本人たちの社会経験がまだ少ないこともあり、ネットなどで集めた情報を基にした、やや机上の空論に近い提案になりがちでした。その活動に地元の方や企業の方の目線も加われば、地域のため何ができるかを生徒たちはよりいろいろな観点から捉えて、考えを深めていくのではないかと、思ったのです」

翌年の2024年度の探究活動を牽引した森 由香里先生も、幅広い外部連携に手ごたえを感じたという。

「町のことに詳しい行政や事業者の方々と、新しい技術や視点をもつ企業

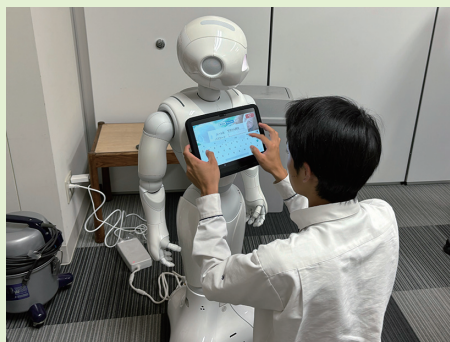
の皆さんと、生徒たちがつながりながら、地域の課題と向き合う。そうすると、今までにない新たな提案がいつぱい出てきたんですよ」

ひりつく体験があるから生徒の思考が深まっていく

例えば「地域商品」を探究したグループは、IT企業の社員が講師となる教育プログラムでWebマーケティングのことを学んだうえで、ネット上のショッピングサイトに販売ページを制作し、特産品を売ることに挑んだ。商品ライオンナップでは、地元の道の駅や生産者に協力を仰ぎ、彼らにインタビューもしたうえで、商品の説明や写真の見せ方を工夫してサイトでPRした。

「防犯・防災」を探究したグループは、世羅町や世羅警察署と連携し、地元の人向けの特殊詐欺防犯教室を開催することに。IT企業提供の別の教育プログラムでAIの活用を学んだので、防犯教室にAIロボットを使う企画を立案、当日の運用のためのプログラミングも行った。また、チラシを作って広報もした。

「保育・教育」を探究したグループは、地



「福祉」を探究する生徒たちは、スマホ相談会を、企業の人から接し方を学んだうえで実施。「防犯・防災」および「歴史・地域資源」を探究した生徒たちは、公共の場でのAIロボットの活用を模索した。

元事業者で結成された地域貢献団体と、子ども食堂を開催。農業経営科の育てた野菜を使ったメニューを考案し、子どもたちが遊べるイベントも企画した。

「科学研究」を探究したグループは、地

左から、2023年度の総合的な探究の時間の主担当の平山愛佳先生、2024年度主担当の森 由香里先生



「地域商品」を探究した生徒たちは、ジャムやプリン、パン、猪肉などの地元の特産品について、生産者の元を訪れ、商品に込めた思いを聞き取ったうえで、ネット上のショッピングサイトで販売のPRをした。

ネット販売にあたり、IT企業の社員からWebマーケティングのことも学習。買いたいと思わせる表現や見せ方を学んだ。広く知らしめる重要性を知り、地元ラジオ局に自ら売り込んでPRした生徒もいた。

元事業者と、児童センターと連携。同センターで、小学生に対して理科の実験と蚕の生態調査を行う交流活動を行った。

こうした社会人との協働で、生徒た

図1 探究活動における連携

主な連携先	主な活動(2024年度)
地元産業	● 食品開発 ● 観光イベント企画 ● 地域商品のオンライン販売
IT企業ほか民間企業	● IT管理のスマート農業の実証 ● 観光施設へのAIロボット活用 ● 防犯教室へのAIロボット活用 ● こども食堂(交流の場の創出)
自治体や大学	● スマホ相談会 ● 世羅町議会意見交換会

生徒インタビュー /

相手の立場になって考え
人を笑顔にするような仕事を



探究では「観光」のグループで、町の関係人口を増やすことに、町役場や旅行会社、中山間地域振興をする方々と挑みました。

世羅町は陸上が盛んなので、陸上教室を軸にいろいろな町の魅力を楽しめる宿泊プランを企画。東京の移住フェアでチラシを配り、SNSでも募集しました。でも定員に達せず中止に…。後日、学校で陸上教室を開いた時に、参加者が楽しんでくれたのが嬉しくて、支えてくださった社会人の方々が「プランは相手の立場になって考えよう」「人の笑顔を見られるから、やりがいがある」と言われていた意味がよくわかりました。また自分たちで企画したいです。(普通科2年生・鈴木雄貴さん)

ちは「自分の進路をより具体的に想像できるようになった」と平山先生は感じている。特に印象的だったのは、期待ほどの結果が出なかった体験を生徒が味わったときだという。どうすればうまくいくのか自問し、社会人からもフィードバックをもらい、「次はこうしたい」「ここが大事だとわかった」などと、その分野の仕事への解像度が高まったのだ。

「地域商品のネット販売に挑んだグループは、企業の人から学んだことを生かしてがんばってページを作ったのですが、簡単には売れない現実も知り、ならこうしてみようと試行錯誤を重ねました。デザインに興味のあった生徒は、その体験から『人々のニーズを捉える重要性を学んだ』そうです。そして『地域に寄り添って地域に喜んでもらえるデ

ザインをやってみよう」という夢ももつようになりました(平山先生)

なかには、活動後に進路を見直す生徒もいる。保育士になりたいと思っていた生徒は、子ども食堂の運営に携わるなかで、幼い子たちと関わることの難しさを実感。もう少し上の年齢層と接することをイメージするようになり、スポーツの指導者を目指すようになった。そのように「向いていない、と気づくのも一つの学びであり、悪いことだとは思っていません」と森先生は言う。

世の中の仕事にふれることを生徒と一緒に教員も楽しむ

また、多様な社会人と進める教育活動は、教員にとってもプラスになると、森先生は捉えている。

「私は20年近く教員一筋でやってきたので、『学校以外の社会を知らない』と言われることがあり、それが結構コンプレックスでもあったんです。この仕事にプライドをもって取り組んできましたし、私生活でいろいろな職業の人に会えば話を聞いたり、生徒の進路の参考になりそうな情報にアンテナも張ってきましたが、確かに、世の中の仕事について知らないことは多いですから。それだけに今、外の人と関わるなかで、生徒と一緒に私も学ばせてもらっているという感覚があります。例えば教員が意識しづらい『何のためにどうやって利益を出すか』といったことを。そうして自分の感じ取ったことも、進路相談や個別の授業に生かしていけたら、と思っています」